

2019年

8月10日

第329号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木 644 番地 1

〒884-0102 TEL 0983-32-2025

守るべきもの

園長 児嶋 草次郎

暑中御見舞い申し上げます。今年も非常に暑い日が続いていますが、皆様、お元気でお過ごしのことと思います。私たちもこの暑さに負けず、庭や畑の雑草にも負けないように、日々がんばっています。子供たちの施設対抗野球・バレーボール大会は7月30日に行われ、野球は今年も優勝して九州大会に出場できることになりました。特にピッチャーのリョウ（中3）、キャッチャーのセイヤ（中3）のこの1年の成長はめざましく、決勝戦は相手のみどり学園に一塁ベースも踏ませない完全試合でした。足腰のしっかりしているリョウの球は重く、今年も九州大会で優勝がねらえると期待しているところです。女子のバレーも、年々少しずつ成長していますが、あと一歩まだ力が足りないようで、今年も九州大会出場は逃しました（3位）。

今年の夏の心配事はやはり台風です。去年は台風襲来のため、野球の九州大会（長崎）が中止になりましたし、園周辺の木々が倒れて片付けが大変でした。大型台風が発生しないように祈るのみです。皆様、くれぐれもお体大切にしてください。

さて、今回の友愛通信では、8月25日に行われる「石井十次セミナー」の講師の先生方の紹介をさせていただきます。今回の全体のテーマは、「日本の未来の児童福祉のあり方を考えるー日本型の児童の自立支援・教育を求めてー」

その趣旨文には次のように書きました。「私たちは、この数年、このセミナーにおいて、イギリス、ドイツ、アメリカ等の社会的養護を中心とした児童福祉のあり方について学んできました。平成28年改正児童福祉法において、我が国においても家庭養育優先原則が明記され、その後の『ビジョン』では里親委託率を欧米並に引き上げる方向性も明示され、現在、各都道府県において推進計画が検討されています。グローバル化する世界の中で、欧米の児童福祉の価値観・理念・形を日本の歴史的福祉文化等にどう融合させていくのか、その分岐点に立たされています。それぞれの地域社会の自助・共助・公助のバランスの中で、家族・地域の福祉文化伝承者としての視点からこれからの児童の自立支援・教育を考えます。」

キーワードは、グローバル化、融合、そして分岐点でしょう。日本の歴史を振り

かえてみても、時代は世界の相互作用の中で刻々と変化していきました。国体が弱体化していけば、欧米の国々に呑みこまれ、植民地化されていく、その姿はアジアの各地で見られましたが、我が国は明治維新後、先人たちが必死に国を守り、その文化面においてもみごとに欧米との融合化に成功し、日本人としての魂を失わずに発展させて来ています。それがグローバル化のあるべき道筋でしょう。

戦後 70 年がすぎた近年、高度の文明・文化を築きあげた国々の間で反グローバル化とも言うべき新たな保守主義が台頭して来ているようにも感じます。その分岐点に立たされているのかもしれませんが。きな臭い混乱の世界に入っていくのか、新たな融合を模索し始めるのか。

私たちが関わる児童福祉の世界は、国体から見れば狭い分野のようにも見えますが、子育て・教育は、次の時代を担う人材育成の重要な仕事であり、決して流されるべきではないと感じているのです。

社会的養護の世界でも、ただ世界標準に合わせれば、それで一件落着として片付けられない、深刻な問題が隠されているのです。去年の石井十次セミナーのティア・キンバーク氏の指摘は衝撃的でした。里親委託率 70%以上のアメリカの里親制度の中身は崩壊していると言われるのです。それを今、日本は子供の最善の利益の名のもとに真似しようとしている。貧困の連鎖を断つどころか、ますますドロ沼にはまっていく可能性もある。

そこで今年は、今までのセミナーで学んだことを総括しながら、私たちの先人たちの築いて来た子育て文化・福祉文化とは何なのかを明らかにし、またグローバル化の時代状況の中でも日本の未来を築く人材を養成するにおいて、守るべき文化とは何なのかを示せたらと願っています。

4名の講師の先生は、私の尊敬する方々ばかりです。まず叶原土筆先生。昭和 10 年（1935）生まれの 84 歳。お父様が広島県の県立児童自立支援施設（教護院）で働いておられた関係で、小さい時から、施設の子供たちと一緒に育てられたとのこと。成長して、広島大学教育学部を卒業され、岡山県の県職員になられます。児童相談所などに勤務された後、導かれるように昭和 41 年（1966）から岡山県立成徳学校（児童自立支援施設）で夫婦小舎制を担当する教護（指導員）として奥様と一緒にはたかれます。

平成元年（1989）校長に就任され、同じ年から約 7 年間全国自立支援施設協議会の会長もつとめられています。平成 8 年に退職されてからは、岡山県の社会福祉法人南野育成園児童養護施設の園長、理事長として働かれて来ました。

叶原先生は、児童自立支援施設の歴史と文化を、しっかり体現されている方とすることができます。協議会の全国会長もされていますので、広い視野もお持ちです。

私のこの仕事におけるスタートは、児童自立支援施設（当時は教護院）の北海道

家庭学校です。当時の校長は谷昌恒（まさつね）先生でした。留岡幸助以来の福祉文化を「一路白髪に到る」という言葉とともにしっかり守る教護院で、軟弱な精神と肉体の私を、父虜一郎が鍛えようとしたのです。文学青年だった私は父の助言を素直に受け入れて、約1年間修行をさせていただきました。今、石井記念友愛園は1年中花に囲まれて生活ができていますが、この文化は北海道家庭学校から取り入れたものです。厳しい労働条件の夫婦小舎制で働かれる先生方の気骨についても学ぶことができました。

石井記念友愛園の指導員となり、後に友愛園の高校生たちをつれて岡山に旅行に行くようになり、叶原先生の器の大きさに甘えて何度か成徳学校に泊めていただいたこともあります。現在叶原先生のお嬢さん御夫婦が夫婦小舎制を担当し、先生の文化を引き継いでおられるとか。日本の児童自立支援施設が守るべき福祉文化とは何なのか、貴重なお話が聞けると期待しています。

次に潮谷愛一先生です。今では元熊本県知事の潮谷義子先生の御主人ですと言った方がわかりやすいでしょう。宣教師モード・パラウスが大正8年（1919）に作った、熊本県の児童養護施設「慈愛園」を引き継がれた潮谷総一郎先生の息子さんです。昭和14年（1939）生まれの80歳。潮谷総一郎先生と言えば、戦後の児童福祉だけではなく、民間社会事業の開拓者であり、ハンセン病患者支援や冤罪事件支援等、ボランティア活動にも広く積極的に関われ、私の父も尊敬していた人でした。父と親交があり、これは最近義子先生に聞いた話ですが、愛一・義子先生は、友愛社で働かないかと父虜一郎より誘われたことがあるとか。敬虔（けいけん）なクリスチャン一家であり、石井十次の精神を復活させるためには、このような方が必要だと考えたのではないかと思います。

愛一先生と義子先生は日本社会事業大学の同窓生ですが、おもしろいエピソードが忘れられません。大学の寮で、愛一先生が真っ赤なTシャツに不似合いなジーンズ姿でいるのを見て、第一印象が「不良みたい」と義子先生は感じられたということです。後でわかるのですが、それらの衣類は、駐留米軍から園に寄贈されたものだったのです。昭和24年生まれの私、職員の子供たちも、終戦後間もない頃は、米国からの支援物資等で生きのびることができたのでした。愛一先生も、施設の中の子供たちと一緒に育てられたわけです。

その後、お父さんの慈愛園を引き継がれ園長に就任されたのですが、なぜか途中から大学教員にもどられています。先生が園長時代、やはり高校生旅行で熊本に行った際、宿泊させていただいたことがあります。ここも園内に小規模の園舎が点在し、家庭的な処遇が行われています。

愛一先生は当時（昭和57年）、重要な指摘をされます。母子健康手帳と一緒に配られていた副読本に「赤ちゃんは初めから一人で寝かせましょう。添い寝はよくあ

りません。」等と書かれているのは間違いだと訴えられたのです。アメリカ式育児法を厚労省が日本に普及させようとしたのです。昭和 39 年からこの副読本が配られていたとか。粘り強く働きかけて昭和 60 年によりやく厚労省はアメリカ式育児方針を撤回したそうです。日本式子育ての重要性を愛一先生は主張されるわけですが、何やら今の社会的養育改革における施設否定論と似たような雰囲気も感じます。くわしいことは当日話してくださることでしょう。

3 番手が藤野興一先生です。叶原先生・潮谷先生が 2 世だとするならば藤野先生は 3 世で、昭和 16 年 (1941) 生まれの 77 歳です。同志社大学を卒業され引き継がれています。実は私は昨年初めて鳥取こども学園を訪れています。藤野先生は 2013 年から 2017 年まで 2 期、児童養護施設協議会の会長をつとめられ、児童養護施設改革にも御尽力くださり、私たちのリーダーでもありました。時代に取り残されていた児童養護施設を「野戦病院みたいなものだ」と表現され、先生の旗振りで大きく改良に向かって動き始めたのです。先生の在任中に厚労省との信頼関係もでき、未来への道路ができたと安心していただけに、退任されすぐ厚労省が出した「ビジョン」には驚愕しました。施設否定論が展開されていたからです。寝耳に水のことでしたので、そのへんの動きが元々あったのか、先生に今回明かしていただけるとありがたいです。

ずっとあこがれていた先輩でありながら、個人的な御縁は昨年が始まるのですが、その後、色々鳥取こども学園の資料を見ているうちに、最近では、岡山孤児院と同じ根っこを持っている、つまり同じ魂なのだと確信するようになっていきます。

鳥取こども学園九十年史を開いていて、二つの歴史的事実を発見したのです。

一つは、明治 20 年に開校された鳥取英和女学校に関する記述です。

「当時、岡山からしばしば訪れて伝道に尽力していたタルカーツ女史は、この年の四月から説教所において『毎日午後三時から四時まで、同教徒の壮年に英語を教授し、婦人には市宿所に於いて教授…』(四月二十八日、『鳥取新報』)する英語教室を開く。これが契機となって学校開設の必要性が叫ばれるようになり、タルカーツ女史を中心に、尾崎又次郎、岡垣春六、上島伝次郎が発起人となって準備をすすめる。」

もう一つの記述は、「倉吉教会が、上代知新や宣教師ローランドらの尽力によって創立されたのは、一八八九(明治 22)年二月のことである。」

この 2 人の宣教師タルカーツ、ローランドは、実は、岡山孤児院の目と鼻の先の東山の「アメリカンボード」宣教師館に住んでいたことがあるのです。石井十次も度々訪れて色々相談したり、寄付金ももらったりしています。

例えば明治 23 年の石井日誌には次のような記述が見られます。

「1 月 31 日 ・鳥取タルカツ師より書面並金八円を寄贈されたり」

「2月19日 ・東山ローランド氏に行く 金七円二十銭を受取り 金三円ローランド氏寄附（一月より六月迄分） 感謝

「3月7日 ・小供と共にローランド氏の鳥取に転せらるるを送る」
さらに明治26年には次のような記述もあります。

「11月21日 ・鳥取ローランド氏より式名の孤児につき照会来る」

「11月26日 ・鳥取より式名の孤児来院」

尾崎信太郎（尾崎又次郎は父）等によって鳥取孤児院ができたのは、明治39年（1906）となっていますが、アメリカンボードの宣教師たちから見れば、岡山孤児院も鳥取孤児院も兄弟みたいなものだったのでしょう。藤野先生の祖父の藤野竹蔵夫妻が関わるようになったのは大正14年（1925）からのようです。岡山孤児院はその次の年に解散しています。藤野家は施設にとっては一番苦しい時期に導かれ、職員たちとともにそれこそ血のにじむような努力を重ねられ、今の「鳥取こども学園」を築いてこられたわけです。藤野興一先生の時代になっても、小舎制はもちろんですが、情緒障害児短期治療施設、自立援助ホームの開設など、先駆的取り組みをされて来ています。私にとっては、兄的存在で、その築いて来られた福祉文化を学び取るため、今春大学を卒業したアキヒコ君を研修にやっています。藤野先生の唱えられる「日本型社会的養護」について、今回聞かせていただきたいと思います。

そして、最後になりましたが、菊池義昭先生です。私と同じ年齢です。毎年、この石井十次セミナーを開くにおいて御助言をいただき、またご出席もいただいている石井十次研究者です。日本大学工学部を卒業後、一時期福祉現場で働かれますが、福島大学大学院で東北地方の冷害の実態を調査することから石井十次研究に導かれ、もう40年近く資料の整理と研究に携わって来られています。「石井十次資料館研究紀要」の編集長をやってくださっています。

ちなみにこの8月発行する研究紀要は第20号で、よく続いて来たものだと、菊池先生の地道なボランティア活動に敬意と感謝を感じているところです。菊池先生は、この第20号の編集後記に次のように書いてくださいました。

「なんと言っても衝撃的であったのは、『アメリカの里親制度は崩壊している』という主旨の内容を含む、ティア先生の講演他の内容でした。アメリカの里親制度の実践現場のもう一方の当事者であるカウンセラー（専門職）からの発言は非常に重要で、この経験的知見を重く受け止める必要があると自覚しました。（略）日本の明治以降の社会的養護の中心は、岡山孤児院等に代表される現在の児童養護施設等であります。しかし、里親の歴史は古くても、里親制度の経験的知見はいまだ未成熟で、そのような現状の中で、拙速に里親制度に移行しても、子どもたちの最善の権利は保証できないと言えるからです。子どもたちの人生が懸かっており、一刻の猶予も許されないからです。」

あの「ビジョン」を作った学者たちは、日本の社会的養護の歴史に関心のない医者や心理学者が中心のようですが、私の不満は、歴史研究者たちにも向けられています。施設否定論が展開されようとしているのに、その歴史を研究して来た学者たちからほとんど反論が出て来ないからです。福祉の歴史を作っていくのは一部の学者や政治家なのか、それとも現場で命をかけて子供たちの生活を守っている人々なのか。福祉文化が守られるのか崩壊への道に進むのか、その分岐点に立たされていると思います。